

東京バッハ合唱団 月報

[第543号] 2007年9月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732
E-mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.543

September 2007

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

「殺すな、破壊するな」を、あらゆる立場から

大村 恵美子

最近、とても興味深い2冊のキリスト教関係の新著をご恵贈いただきました。秋田稔氏著『ヨハネの黙示録に学ぶ』(新教出版社、2007年6月)と、上村静氏著『キリスト教信仰の成立』(fad叢書、2007年6月)です。

「ヨハネ黙示録」は、バッハのカンタータのテキストにもしばしば引用されて、終末論的な激動の描写や、究極の平和にみちびかれる天上の讃歌などが、バッハの多くの代表作品を生み出しています。いちど良い手引きをえて、じっくり読んでおきたいと思っていたので、まことにありがたく、多くを学ばせていただくことができました。ご著作を重ねられるごとに、ますます深い真理に迫ってゆかれるような秋田先生のご精進に、尊敬も深まるばかりです。このご本については、森井眞先生から当月報紙上でお伝えいただくことになっています。

もう一つの、上村著『キリスト教信仰の成立 ユダヤ教からの分離とその諸問題』のほうでは、私たちの月報にお寄せいただいたもの(「宗教の倒錯 キリスト教の場合」、『月報』533号、2006年11月)が、「(大村恵美子)氏は宗教間対話の可能性とその困難にご興味がおありのようなので、以下ではその点について私見を述べたいと思う」として、最終章に6ページにわたって全文再録されていました。

全体の内容は、つぎの5章からなっています。

- 第1章 キリスト教のユダヤ教からの分離
- 第2章 古代ユダヤ教における「民族主義」「普遍主義」「個人主義」
- 第3章 イザヤ書6章9-10節
- 第4章 五書がトラーナーな理由
- 第5章 宗教の倒錯

190ページある全体についてのご紹介は、とてもできませんので、ここでは、昨年の月報にいただいた内容に限って、私の反応を短く述べることにとどめようと思います。マタイ受難曲に親しんできて、われわれとユダヤ人問題が、イエス生存の頃からの歴史的な重い問題だったことを、あらためて生々しく実感できた方々も多いと思います。それを整理してみるのに、この著はとても役立つと思われ、一読をおすすめします。

(発行者: 関東神学ゼミナール、〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-9-11 フェニックス西早稲田 402号、西早稲田集会所、メールアドレス: fad@iya-ten.net)

昨年、私が宗教間対話の可能性について、上村氏にお

考えを伺ったのに対し、彼も、それは現状ではとても困難との見通しを述べられました。「宗教間対話」といって、諸宗教の指導者が互いに異なる宗教を理解しあうことといったイメージを持たれる向きもあるかと思う。政治的(表面的)な宗教間対話はそれでいいのかも知れない...、けれども」(上村著 p.180)とつづきます。

秋田先生が深く打たれたと言われる、矢内原忠雄氏の殉教者的熱誠をもってなされた「ヨハネ黙示録」研究は、当時の緊迫した日本の戦争への傾斜をつよく反映しています。それと同様、現在も、私にとっては、全地球上の同時代人にむかって、ただひとつ「殺すな、破壊するな」を、あらゆる立場から発しつつげたい。学者・研究者の立場でも、しかしかのデータから、人類の生存はいずれ困難、という結論が出ようと、それでもわれわれはこういう努力をして切りひらこうと試みる、というところまで語っていただきたい。これが私の本音です。

人間同士の対話が「表面的」にとどまることの危惧については、またしても(私はこれまでいくつかのスピーチ等で引用した覚えがあるのですが)シュヴァイツァーの次のことばを思い出します。

「一般に、人間と人間との関係のなかには、私たちが通常みとめているよりも、はるかに多くの神秘がひそんでいるのではないだろうか? なん年もまえから毎日いっしょにくらしている相手であっても、ほんとうにその人を自分が知っているとは、わたしたちの誰も主張するわけにはいかない。私たちはどんなに親密な人たちにも、自分の内的体験をつくりあげているものの断片しか伝えることができないのである。(…) 私たちは、たがいに相手の顔形をはっきり見わけることのできない薄暗がりのなかを、いっしょに歩いているのだ。ただ、ときおり、私たちが道づれとなにかを経験したり、たがいにことばをかわしたりすることによって、一瞬のあいだ、稲妻に照らし出されたように、私たちのそばにその道づれのいることがわかる。(…)」

(「生い立ちの記」国松孝二訳)

つまり、人間は、同時代に生きる自・他両者が、並んで歩いても、相手をとことん知りつくすことはないし、あるべきではないという信念です。自・他ともに内部をこじあけるようなことは、人間の尊厳に反する。それでも並んで歩きつづけるものとして、ときおりチラリと光

があたって、かいま見るお互いの姿に心を安んじて、生きつづけよう、歩きつづけようということです。生きつづけ、歩きつづけるのを互いに助けることが重要なので、死に向かわせたり、ましてや殺したりすることを、いっさい斥ける。そういう対話を、ニヒルにならずに続けようというのです（困難でも！）。

みんな平行線をたどるのは、はじめから自明と言えるでしょう。しかし、風土、環境、条件のことになった多様な人間たちが、自分にあった形の宗教になじむのを認めたくて、生への努力を分かち合うことは、いやおうなしの務めなのです。はじめは、自分の宗教が最高と確信していても、そのこだわりは何によるものか、表現こそ違い、目標として共通するものがあるのではないかと、だんだん角度のちがう多数の目に、とらえられるようになってくるのではないのでしょうか。

とにかく、私の主張は、換言すれば平たくありふれたことになりましょうが、「殺し合い、破壊し合いを即刻止めよ」と、宗教人、学者、芸術家、ひろくマニフェストの手段をもつすべての人間が、本気で世界に訴えつづけること、これに尽きるのです。

LLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLL

秋田稔著『ヨハネの黙示録に学ぶ』

読後感に事寄せて

森井 眞（団友）

碩学、秋田稔氏は、1998年に始められた「私たちの聖書勉強会」での研究の成果を、「マルコ福音書」（『イエスの生と死』上・下）と「ローマ書」（『パウロは私たちにとって誰なのか』上・下）についてすでに上梓しておられるが、このたび『ヨハネの黙示録に学ぶ』をあらたに世に出された。

周知のとおり「ヨハネ黙示録」は新約聖書のなかでも唯一、イエスの言行録や使徒の書簡と異なり、紀元前2世紀の半ばころから紀元1世紀の終りにかけてオリエントで流行した黙示文学の一種である。「これは聖書の正典ではない」という研究者さえあったほどの特異な文書であって、しばしば象徴的表現や数字が用いられており、当時のあの世界からひどくかけ離れた現代に生きる私ごとき無教養人にはきわめて晦渋で、それは読むことがすでに謎解きそのものである。

秋田氏はこの取りつきがたい文章を、じつに厳密に、原典にあたって正確に読みとき、広く諸家の解釈を取捨選択して、私たち読者を納得させ、謎解きの楽しさを与えてくださる。まことに貴重なお仕事だと思う。

それでもなお、正直いって「黙示録」は私たちからじつに遠い世界の、じつに特殊、奇怪な文書である。秋田氏があえてそれを取り上げられたのはなぜか。

矢内原忠雄はその個人雑誌『嘉信』で、1941年、「ヨハネ黙示録講義」の執筆を始めた（もっともこの年は2回のみで、あとは戦後の46年から48年）。「ヨハネ黙示

録」は紀元90年代に書かれたとされているが、そのころローマ帝国は皇帝を神として拝むことを国民に強制し、従わないキリスト教徒は迫害されて、「黙示録」の著者ヨハネも島流しにあった。迫害はローマから地方にもおよび、いずれ来るべき3~4世紀のキリスト教徒大迫害の悲劇も予感されて、信徒は殉教の覚悟を迫られ、世の終りも近いのだと絶望的な危機感に苦しんでいた。「黙示録」はそんな信徒を、誘惑に負けず最後まで正しく生きる者に真の救いがあることを説いて、慰め励ますために書かれたが、1941年とは、広島・長崎に原爆が投下されついに日本国を滅ぼすことになるあの日米戦争の始まる年であり、日本でもローマのように天皇が神にされ、国民は思想・良心の自由をうばわれて、人間のいのちが、尊厳が、まったく無視されていた。そんな現実のなか、国策を批判し、戦争に賛成しないで大学を追われた矢内原は、それにもかかわらず少しも節を曲げず、悪に抵抗する勇気を失わず、深い想いをこめてその「ヨハネ黙示録講義」を書いている。秋田氏はその気迫に感動して、あの時代に矢内原の心に強く語りかけた「黙示録」を取り上げられたようである。

しかし「黙示録」は、いま、私たちに何を問いかけているのか。現代は古代ローマの状況とはおよそ異なるように見える。とはいえ、真に求めるべきものを求めず、いのちの尊さを知らず、個人の尊厳を重んぜず、力を崇拜し戦争を肯定したあのローマ帝国、というよりローマ的な人間存在そのものは、あい変わらず私たちを蔽い、今の人間の現実の世界を圧倒的な規模で「死（闇）の力」が支配しているのではなからうか。私たちはそんな現実に対して、根源的な視点...からする徹底批判が求められており、キリスト教も 現実逃避 や宗教的 自己満足 にとどまってはならず、現実がどうであろうと私たち人間は 絶望的な現実から逃避せず、真にあるべき歴史形成に積極的に参加し、世界への日本よりの存在をかけたの呼びかけである平和憲法を守り抜き、平和を創り出すことを、捨て身で目指すべきではないか。

秋田氏が、『ヨハネの黙示録に学ぶ』をとおして、私に語りかけられたのはそのようなことであり、私は本書から深い感銘をえた次第である。なお 内はすべて本書からの私の自分勝手な引用である。

第101回定期演奏会のお知らせ

本年3月の第100回定期演奏会 マタイ受難曲 にひきつづき、創立45周年記念として、11月17日（土）に第101回定期演奏会が催されます。

例年と異なり、12月ではないこと、またこれまであまり使ったことのない東銀座の中央会館が会場となったことにご注意くださり、早めに入場券をお申し込みいただけますよう、お待ち申し上げます。

また、団友・後援会員の皆様には、この月報とともにご招待状を同封いたしましたので、お見逃しなくお受けとりくださいますよう、お願い申し上げます。

東京パッパ合唱団

月報 537号(2007年3月)に、「尋ね人...この人をご存じありませんか？」と題し、ミケランジェロ「ロンダニーニのピエタ」の消息をお尋ねしたところ、お二人からそれぞれ、すばらしい関連のご著書を紹介いただいたことは、すでにお知らせしました(月報 538号参照)。このたび、シュッツ合唱団団員の小西久美子様よりも、先の記事に促されてのエッセーをお寄せいただきましたので、ご紹介させていただきます。ありがとうございます。

ピエタ・ロンダニーニ

小西 久美子

すぐれた芸術作品というものは、絵画でも彫刻でも、ある種の喚起力をもっている。それは、作品をみる側に、理屈ぬきに働きかける力である。相手の理性ではなく、心に直接呼びかけ、あるいは誘い、何ごとかを気づかせ、またみる者の中の何ものかを目覚めさせる。あるときには、具体的な一歩を踏み出させさえる…。それを、喚起力とわたしは名づけたい。その時は気づかなくとも、心の深い泉の底に落ち、時間がたっても動かない小石ひとつ、とでもいおうか。

この作品は、古今東西の彫刻の歴史上、この喚起力において群を抜くものだというのが、貧しい研究経験しかないものの、いまの私にとって、一番びったりくる表現である。「ロンダニーニのピエタ」とは、だがなんという美しい響きだろうか！イタリア語はきらきらと母音をはっきりしている反面、子音が重なると発音が難しいが、これは明瞭な響きだ。誰でもすらすらと舌に乗せられる。だが、この彫刻を依頼したといわれているロンダニーニ伯爵の人となり、いったい誰か関心をもつ人がいるだろうか…。誰もいまい。だが伯爵はこの特異な作品により、その家名を美術史上永遠のものとしたのである。あらゆる歴史を振りかえったとき、枚挙にいとまのない神々の悪戯である。

ともあれ、ルネッサンスの三傑ともいべき選ばれた三人の天才。完全なる超人、冷徹な観察眼の人、レオナルド・ダ・ヴィンチ。神の寵児にして夭折の人ラファエル。そして中でも一番人間くささを後世の我々に感じさせるのが、このミケランジェロではなからうか。システナ礼拝堂の天井に向け、コインを投げ上げその力を誇ったとか、天井画を描き続けて首がまがってしまったとか、多くの逸話が残っている。時の法王との確執も有名な話である。

さて昔語りになるが、ひところ“芸術における未完成”という論が出て、ひとつのブームとなったことがある。私自身はここで何かをいう資格のある者ではないが、今もネット上には、その当時の論壇の熱の名残りが、跡をひいているようだ。

ミケランジェロのこの作品はなるほど、未完成に感じられるところ大であるから、この「未完成論」の格好のモデルとなったことだろう。もちろん、未完成というありようの中にも、美はいかようにも見つけることができよう。廃墟の美、という概念もある(実際に廃墟の写真ばかり撮る写真家もいる)。しかし、その作品が完成か未完成かを決めるのは、芸術世界の創造主たる作り手本人だけであり、他人が甲論乙駁しても仕方がないのではないだろうか。シューベルトは、はじめから「未完成」と自分の作品につけたわけではない。モーツァルトの「レクイエム」も、終わりの部分の凡庸をなじっても始まるまい。未完成を問題とするなら、レオナルドなど、彼の作品は殆ど未完成といってもいいのだ。また、図面上は完成していても実際つくることのできない建築もある。完成か未完成かを論じ、そこに何かの意味を見出そうとすることに、それほど大きな意義があるとは思えない。

必要なのは、ただ、ある作品の前に、時間をとって私たちの心を置くという行為だろう。それは、何かの美術全集の写真でもかまわない(極端をいえば、できの悪い

写真だって良いのだ)相手と二人きりになって、自分を空っぽにすることだ。ルネッサンスに関する知識も、ミケランジェロについての話もここはおいておこう。ミケランジェロもレオナルドも、後世のわれわれから見れば、確かにルネッサンスの偉人に相違ないが、その同時代を生きていた人々と同じように、愛したり苦しんだり、嘆いたりため息をついたりして、現代の私たちと同じように生きていたはずなのだ。われわれはこの平凡な事実を、ともすると忘れ、飛び越して天才を天才の神棚に載せ、すべてを語りたがるきらいがある。

歴史的知識、あるいは宗教上の知識などの小ざかしい教養というのは、

芸術を理解しようと努めるあまり、心で感じるという、芸術における一番大事な受容のかたちを、非常にしばしばゆがめてしまうことがあると思う。人は皆知っているはずだ。愛するということ、慈しむこと、肌のぬくもりのいとしさ。そして歩いてきた人生の道のりへの悔恨・諦念、憎しみも絶望も、また感謝も。それらの総体が、われわれ人間というものだと。今生きていることの喜び、そして希望…。これらの感情をないまぜにした、口でできない、ごっちゃになった何かわからないエーテルのような複雑な、だが美しい昇華した心の動き...それらを、人間のうちに呼び覚ますとき、はじめて芸術はその本来の役割を全うしていると私は信じる。

さあ、この母子像の前に立とう。

ミケランジェロを知らなくともいい。イタリア・ルネッサンスの知識もいらない。あなたの前に、ただ一組の



母と子がいるだけだ。とても疲れて...たいそう静かにそこにいる。これを彫ったのは確かに天才だったかも知れない。だが、もう昔の力も失せ、死もまぢかに迫った彫刻家の心は、過去の栄光とは無縁だ。像にすぎるように、もしかしたら目も白く濁っているかも知れない。節くれ立った指の腹で、指紋も消えてしまった指の腹で、ゆっくりと石を撫でていく...、彼の見えない目、ぶ厚い掌は、かぎりなく繊細に石の表面に、母を、そして息子、あるいは彼自身を感じている。どれほど鑿をふるっただろうか、手がみな覚えている...。だが、ダビデの像に刻んだ過剰なまでの表現も、法王の座にすら屈しなかった激情も、今は風のように去って形もない。天才といえども、ただ一人の老人がいるだけである。裸の人間がいるだけである。栄光も挫折もすべて、神の手の網の目が通して、ろ過してしまった...

この像がピエタならば、母は聖母マリア、子はイエス・キリストであろう。だが、神の僕といいながらも、神ならぬ人間は、人間であればこそその証明として、営々としてはるか昔から母子像を刻んできた。優れた芸術作品ほど、具体的なテーマを超えて普遍に通じている。この作品は、ピエタというキリスト教美術の一主題としての表現を一足とびに越え、静謐の中に、人類普遍のテーマである母と子、親と子、生と死という永遠の命題の前へと、われわれを導いてくれている。

LLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLL

創立 45 周年記念懇親会に出席して

松尾 茂春 (団員：バス)

東京バッハ合唱団の創立 45 周年記念懇親会は 2007 年 7 月 1 日、午後 5 時より、新宿西口の「Y's エステック情報ビル店」にておこなわれました。出席は大村先生、お客様 5 名、マタイ受難曲での児童合唱団員 1 名、ソプラノ 7 名、アルト 8 名、テノール 2 名、バス 8 名。司会は団員としても、また司会の役回りとしても超ベテランのバス加藤さん。

まず乾杯に先立ち、飛びきり上等の音楽の贈り物 - ヴァイオリニストの西川豪さんによる独奏がありました。曲目は、バッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 3 番 (ハ長調 BWV1005。第 2 楽章のフーガ主題がモテット 番のコラールと同じモチーフによる点で関わりの深い作品) から、この日は第 3、第 4 楽章を演奏していただきました。ガラス越しに見える夕闇迫る空を背景に美しく歌われる緩徐楽章、そしてくっきりした輪郭と躍動感にあふれた演奏での最終楽章を堪能し、45 周年記念会に相応しい幕開けです。

個人的には、20 年前の私の結婚式の祝会 (会場は幼稚園の園舎で、写真を見ると壁には消火器と「お誕生日おめでとう」のシール) で、ご両親にヴァイオリン・ピアノのデュオを演奏いただいた時、豪君はお母さんの足を



写真提供：菅間五郎 (団員：バス)

で這い回っていたことを思い出しつつ、その成長ぶりに感慨を深くしました。

演奏後、テノール川戸さんの音頭による乾杯、そして最初に後援会員の花井鉄弥様からお話をいただきました。食事の時間をおいて、加藤さんのリードで、次々とスピーチが続きます。アルト三上さんのお知り合いである木村和世様、高野様。45 周年記念文集の紹介と 45 年の歴史についての説明の後、ソプラノから荒井せつ子さん、黒田みつ子さん。そして マタイ受難曲 を親子で歌われた S. 関順子さんと児童合唱の関まりこさん。アルトからは高崎弘子さん、平田輝子さん、三好泰子さん。テノールからは大村健二さん。バスからは野本哲雄さん、藤田正記さん、柳元宏史さん、森永毅彦さん、そして創立以来の在籍となる加藤剛男さん。

皆様の一つ一つのスピーチに思いと個性と歴史が感じられ、要約だけでも綴れば素敵な報告となるのですが、あいにく即時記録する力に乏しく、記憶代わりに記録メディアを活かせなかったこともあって、お名前だけ記載させていただきます。

最後に大村恵美子先生からのお話をもって記念懇親会は閉じられました。大村先生のお話からは、これまでいつも「まだ生きている」という意識のもとに進んできたこと、10 年前に「45 周年まで」と思って計画を立てたけれども、その 45 年目にあって「まだ生きている」今、演奏においても (既演奏のカンタータは、まだ 120 曲ほど。約 6 割) 訳詞つき楽譜出版においても、これからの道筋をつけていきたい旨語られた言葉が心に残り、到達点としての 45 年以上に、新たな出発点としての 45 年であることの思いを新たにしました。

音楽にせよ他のジャンルにせよ、一皮剥けば一過性のお手軽なノリと浅い感傷が稀薄に詰まっているだけのようない代物が幅を利かせる昨今、透徹した深さの込められた揺るぎない構造から躍動する喜びが湧き出すバッハの音楽が、より知られ、愛され、探求され、継承されていくことを願いつつ、バッハ合唱団で歌い活動することが、自身の喜びを深めると共に、わずかでもその働きに加わることになるならば、それはさらに幸いなことと思っています。

FINE